

「今昔物語集」巻十五の直接話法引用形式

― 往生伝とのかかわりにおいて ―

山口 康子

一、序

平安時代に次々と成立した往生伝の起点となっている「日本往生極楽記」は、「今昔物語集」巻十五に深い影響を与えている。寛和元年（九八五）頃成立と考えられる「日本往生極楽記」は、長久年間（一〇四〇～四三）成立の「法華驗記」に継承され、更にこの両書は「今昔物語集」巻十五に書承された^{附1}。巻十五は「本朝付仏法」と題され、往生譚が集められているが、その説話配列においてもこの両書、とりわけ「日本往生極楽記」の配列法にならったものと考えられる。勿論若干の配列順移動があり、そこに「今昔物語集」編者の独自の配列意識をみようとする論もあるが、いずれにせよ「今昔」編者が巻十五の構成に際して「日本往生極楽記」所収説話を大量に使用したことは否めない。「ほとんど日本往生極楽記や法華驗記の焼き直しで、作者の奔放な空想はない。」（長野 嘗一「日本古典全書・今昔物語」頭注・朝日新聞社）といわれ、原話離れた説話の存在も明らかながら、概していえば、原話の「焼き直し」、それゆえの類型化を認めるのが大かたの見解である^{附2}。

「今昔」編者が巻十五を往生説話篇として構成しようとした時、

往生伝の起点たる「日本往生極楽記」を前に、どのような姿勢で文飾を行なったのであろうか。変体漢文の原典によって得た情報・知識を漢字片仮名交りの、いわゆる片仮名宣命体の文章に書き改めてゆく場合・単なる訓み下し文に直すのでない限り、「今昔」編述者の執筆姿勢が、筆癖といわれる程度にせよ現われるのが当然と思われる。それとも「今昔」は巻十五に限り、単なる翻訳文にすぎないと考えるべきなのだろうか。

今、その点を明らかにするために、「今昔物語集」の文章の特徴の一つと考えられる直接話法引用形式^{注3}に関して、原典の変体漢文体とのかかわりを、次のように整理して比較する。

1. 巻十五と日本往生極楽記（極記と略する場合もある）との比較

2. 巻十五と法華驗記（驗記と略する場合もある）との比較

3. 巻十五と極記・驗記、三書共通説話の比較

4. 巻十五の出典未詳話における直接話法引用形式

「今昔物語集」の独創性はその物語性にあると黒部通善氏は主張される^{附4}。出典文献の表現を直接話法引用形式の対比において検討

36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
光孝天皇孫尼	寬忠姉尼	尼某——伊勢国	源信母尼	釈妙——叡桓聖人母	流浪尼——鎮西筑前国	藤原義孝——春宮亮右少將從五下	源雅通——丹波守中宮亮正四下	越智益躬——伊豫国	藤原仲遠——越中前司	阿武大夫——長門国	造惡業人	伴彥真妻——近江守妻	小野喬木女——右大弁藤原佐世妻	女弟子藤原氏	老嫗——伊勢国飯高郡	加賀の女——加賀国	女弟子息長氏——近江国坂田郡	從童滝丸——仁和寺觀峰威儀師從童
30	31	32			34		36					37	38	39	41	42	40	
				下99	下103	下102	下111	下104	下97									

表中（ ）は、異伝と考えられるもの

表Ⅰに明らかなとおり、「今昔」巻十五が取りこんだ「極記」の
 說話は、10 5 8 (9) 11 12 13 14 15 19 20 18 24 25 26 28 21 22 (19) 27 29 35 33 30
 31 32 34 36 37 38 39 41 42 40の計三五話。うち9・19の二話は同一人物の
 説話ではあるが出典とは考えにくい異伝である。若干の出入りはあ
 るものの、大むね「極記」の流れに従って構成されていること、諸
 家の説かれるとおり一目瞭然といえよう。

又、「驗記」においては、中 52・中 51・上 12・下 102・下 84・上 6・中 73・下 90・下 94・下 101・下 95・下 99・下 103・下 102・下 111・下 104・下 97 の計一七話であり、うち下 84・上 6 の二話が異伝である。

三書に共通の説話は、「今昔」の説話番号順に「今昔」「極記」「験記」の説話番号を対比し、人物名もあげてみよう。

19
|
26
|
上
12
玄海

21
|
21
|
下
120

34
|
33
|
下
101
高階良臣

42
|
34
|
下
103
藤原義孝

44
|
36
|
下
11
越
智
益
躬

計五話が見出せるが、「極記」「驗記」のいずれが「今昔」の典拠となっているかについては、必ずしも明らかではない。

次に「今昔」の出典未詳説話は、異伝と考えられるものを含めて
 (4) 14 15 22 (23) 24 (27) 39 41 47 54 の計一話あり、4・23・27の三話は異
 伝が見出せる。「極記」「驗記」には同話類話は見出せないものの、
 他の往生記あるいは説話集に同話類話と見なされる説話が存するも
 のを除くと、現在のところ、「今昔物語集」の単独説話と見なされ
 るものは、24語（鎮西で千日講を行った聖人）、41語（鎮西筑前国
 の放浪尼）、54語（仁和寺の観峯威儀師の従童）の三話のみである。

以上の検討の結果、「今昔物語集」巻十五所収の計五四語を次の四群に整理し、「今昔」説話番号で示す。

A 群Ⅱ「今昔」「極記」共通話——計二八話

1 2 3 5 6 7 8 9 10 13 16 17 18 20 25 26 31 32 33 36 37 38 48 49 50 51 52 53

B 群Ⅱ「今昔」「驗記」共通話——計一〇話

11 12 28 29 30 35 40 43 45 46

C 群Ⅱ「今昔」「極記」「驗記」共通話——計五話

19 21 34 42 43

D 群Ⅱ「極記」「驗記」に共通話のない話——計一一話

(4) 14 15 22 23 24 27 39 41 47 54

()で示した、異伝と考えられる説話については、問題の性格上、共通話のない説話の中に入れて考察する。

三、「今昔」「極記」の比較

巻十五の計54話の半数強を占めるA群二八話を検討する。まず本文を対比して提示しよう。巻頭第一語を例にとって考察する。

元興寺智光頼光往生語第一語

「極記」第一〇話

今昔、元興寺ニ智光・頼光ト云フ二人ノ學生有ケリ。年来、此ノ二人ノ人、同ジ房ニ住テ修學スルニ、頼光、漸ク老ニ至ルマデ懈怠ニシ學問ヲモ不為ズ、物云フ事モ无クシテ、常ニ寝ケリ。智光ハ、心ニ智ノ深クシ懃ニ學問ヲ好テ、止事无キ學生ト成ヌ。而ル間、頼光、既ニ死ヌ。其ノ後、智光、此レヲ歎テ云ク、①「頼光ハ、此レ、多年ノ親シキ友也。而ルニ、年来、物云フ事无ク、學問不為テ常ニ寝キ。死テ後、何ナ報ヲカ受タラム、善惡、更ニ難知シト。如此ク思歎キテ、二三月許、②「頼光ノ生タラム所ヲ知ラム心ニ祈念ニシ、智光、夢ニ④「頼光ノ有ル所ニ至。見レバ、其ノ所ノ莊嚴微妙ニシ浄土ニ似タリ。智光、此レヲ恠ムマ、頼光ニ問テ云ク、⑤「此レ、何ナル所ソ」ト。頼光、答テ云ク、⑥「此レハ極樂也。汝ガ⑦「依テ、我レ、生所ヲ示ス也。早ク返リ可去シ。此レ、汝ガ所居ニ⑧」。智光ノ云ク、⑨「我レ、⑩「專ニ浄土ニ生レム願フ心有リ、何ノ可返キ」。頼光ノ云ク、⑪「汝デ、行業无シ、暫クモ此ニ不可留ズ」ト。智光ノ云ク、⑫「汝ハ生タリシ時、勤ル所无カリ何ソ、此所ニ生タル」。頼光答テ云ク、⑬「不知ズ、我レハ、往生ノ因縁有ルニ依テ、此ノ所ニ生タル也。我レ、昔シ、諸ノ經論ヲ披キ見テ、極樂ニ生レム事ヲ願ヒキ。此レヲ深ク思ヒシ依テ、物云フ事无カリ。四ノ威儀ノ中ニ只弥陀ノ相好・浄土ノ莊嚴ヲ觀シマ、他ノ思ヒ无クシ静カニ寝シタリ也。年来、其ノ功積リテ、今、此ノ土ニ来レル也。汝ハ、法文ヲ覺シテ其ノ

元興寺智光頼光兩僧。從ニ少年時一同室修學。頼光及ニ暮年一興レ人不レ語。似レ有レ所レ失。智光怪而問之。都無レ所レ答。數年之後、頼光入滅。智光自歎曰。①「頼光者是多年親友也。頃年無ニ言語。無ニ行法。一徒以逝去。受生之處。善惡難レ知」。二三月間。至心祈念。智光夢④「到ニ頼光所。見之似ニ浄土。問曰。⑤「是何處乎」。答曰。⑥「是極樂也。以ニ汝懇志。一示ニ我生處」也。早可ニ歸去。土非ニ汝所レ居」。智光曰。⑦「我願レ」。⑧「生ニ浄土ニ何耶」。頼光答曰。⑨「汝無ニ行業。不レ可ニ暫留」。重問曰。⑩「汝生前無レ所レ行。何得レ生ニ此土一乎」。答曰。⑪「汝不レ知ニ我往生因縁一乎。我昔披ニ見經論。欲レ生ニ極樂。倩而思

義理ヲ悟テ智恵朗カ也ト云ヘド心散乱シテ、善根微少也。然レバ、未ダ浄土ノ業因ヲ不殖ス。ト。智光、此レヲ聞テ、泣キ悲ムデ、問テ云ク、^⑨「然ラバ、何ヲ以テカ、決定シテ往生ヲ可得キト。頼光ノ云ク、^⑩其ノ事、我レ、答フル不能ス。然レバ、阿弥陀佛ニ問ヒ可奉シト云テ、即チ、智光ヲ引テ共ニ佛ノ御前ニ詣ツ。

智光、佛ニ向ヒ奉テ、掌ヲ合セテ、禮拜シテ佛ニ白シテ言サク、^⑪「何ナル善根ヲ修シテ此ノ土ニ生ル事ヲ可得キ。願クハ、此レヲ教ヘ給ヘト。佛、智光ニ告テ宣ハク^⑫佛ノ相好・浄土ノ莊嚴ヲ可觀シト。智光ノ申サク、^⑬此ノ土ノ莊嚴、微妙廣博ニシ心・眼ノ及所ニ非ス。凡夫ノ心ニ、何カ此レヲ觀ゼム其ノ時ニ、佛、即チ右ノ手ヲ舉テ、掌ノ中ニ小サキ浄土ヲ現シ給フト見テ、夢覺ス。忽ニ繪師ヲ呼テ夢ニ見ル所ノ佛ノ掌ノ中ノ小浄土ノ相ヲ令寫メテ、一生ノ間、此ヲ觀シテ、智光、亦、遂ニ往生ヲ得ケリ。

其ノ後、其ノ房ヲ極樂房ト名付テ、其ノ寫セル繪像ヲ保テ、其ノ前ニ念佛ヲ唱ヘ講ヲ行フ事、于今不絶ス。心有ラバ、必ズ可礼奉キ繪像也トナ語リ傳ヘタトヤ。

「今昔」第一話には、直接話法引用形式が、文中①～⑬、引用されている会話文中の引用形式、二重引用⑤、夢の引用③の如く單純に加算して計一五例、見出される。引用形式⑤の中に含みこまれる二重引用⑤、および引用形式③～⑬をすべて括りこんでいる夢の引用④は別に示すこととして、まず、①～⑬の引用形式を対照して示す。

①・智光此レヲ歎テ云ク「頼光ハ此レ多年ノ親シキ友也。而ル二年來物云フ事无ク、学問不為ズシテ常ニ寝タリテ、死テ後、何ナル報ヲカ受タラム、善惡更ニ難知シ」ト。(今昔)

・智光自歎曰「頼光者は多年親友也。頃年無言語。無行法。徒以逝去。受生之處。善惡難知。」(極記)

兩書の直接話法引用形式を対応して示し、引用動詞に〳〵を

之。知レ不ニ容易。是以捨ニ人事一絶ニ言語。四威儀中。唯觀ニ彌陀相好浄土莊嚴。一多年積レ功今纔來也。汝身意散亂。善根微少。未レ足レ爲ニ浄土業因。」智光自聞ニ斯言一悲泣不レ休重問曰。^⑭「何爲決定可レ得ニ往生。」頼光曰。^⑮「可レ問ニ於佛。」即引ニ智光一共詣ニ佛前。智光頭面禮拜白レ佛言。^⑯「得テ修ニ何善一生ニ此浄土上。」佛告ニ智光一曰。^⑰「可レ觀ニ佛相好浄土莊嚴。」智光曰。^⑱「此土莊嚴微妙廣博心眼不レ及。凡夫短慮何得レ觀之。」佛即舉ニ右手一而掌中現ニ小浄土。」智光夢覺。忽命ニ書工一令レ圖ニ夢所レ見之浄土相。一生觀之終得ニ往生。」云云。

付し、「今昔」文中に、「験記」に同じ語句の存する箇所――「極記」とは表現内容は同じながら若干表現の異なる箇所……と傍線を付した。「極記」にはなく「今昔」編述者の付加部分は無記号である。

②・如此ク思歎キテ、二三月許「頼光ノ生タラム所ヲ知ラム」ト心ニ祈念スルニ、(今昔)

・二三月間。至心祈念。(極記・該当部分に直接話法なし。)

③・智光此レヲ恠ムデ頼光ニ問テ云ク「此レ何ナル所ゾ」ト。(今昔)

・問曰「是何處乎。」(極記)

④・頼光答テ云ク「此レハ極樂也。汝ガ〳〵依テ我レ生所ヲ示ス也。早ク返リ可去シ。此レ汝ガ所居ニ〳〵」。(今昔)

・答曰「是極樂也。以汝懇志示我生處也。早可歸去。土非汝所居。」
(極記)

「極記」の文章と対応すると、「今昔」の二箇所の欠字が、
それぞれ「懇志」「非ズ」が該当することがわかる。

⑤・智光ノ云ク「我レ」⑥「專ニ浄土ニ生レム」ト願フ心有リ、何
ノ可返キ」。(今昔)

・智光曰「我願生浄土何耶。」(極記)

⑥・頼光ノ云ク「汝デ行業无シ、暫クモ此ニ不可留ズ」ト。(今昔)

・頼光答曰「汝無行業。不可暫留。」(極記)

⑦・智光ノ云ク「汝ハ生タリシ時、勤ル所无カリキ。何ゾ此所ニ生
タル」ト。(今昔)

・重問曰「汝生前無所行。何得生此土乎。」(極記)

⑧・頼光答テ云ク「不知ズヤ、我レハ往生ノ因縁有ルニ依テ此ノ所
ニ生タル也。我レ昔シ諸ノ経論ヲ披キ見テ極樂ニ生レム事ヲ願
ヒキ。此レヲ深ク思ヒシニ依テ物云フ事无カリキ。四ノ威儀ノ
中ニ只弥陀ノ相好・浄土ノ莊嚴ヲ觀シテ他ノ思ヒ无クシテ静カ
ニ寢タリシ也。年来其ノ功積リテ今此ノ土ニ来レル也。汝ハ法
文ヲ覺シテ其ノ義理ヲ悟テ智慧朗力也ト云ヘドモ、心散乱シテ
善根微少也。然レバ、未ダ浄土ノ業因ヲ不殖ズ」ト。(今昔)

・答曰「汝不知我往生因縁乎。我昔披見経論。欲生極樂。情而思
之。知不容易。是以捨人事絶言語。四威儀中。唯觀弥陀相好浄
土莊嚴。多年積功。今纔来也。汝身意散乱。善根微少。未足爲
浄土業因。」(極記)

⑨・智光此レヲ聞テ泣キ悲ムデ問テ云ク「然ラバ何ヲ以テカ決定シ
テ往生ヲ可得キ」ト。(今昔)

・智光自聞斯言。非泣不休。重問曰「何爲決定可得往生。」(極記)

⑩・頼光ノ云ク「其ノ事我レ答フルニ不能ズ。然レバ、阿弥陀佛ニ
問ヒ可奉シ」ト云テ、(今昔)

・頼光曰「可問於佛。」(極記)

⑪・智光佛ニ向ヒ奉テ掌ヲ合セテ禮拜シテ佛ニ白シテ言サク「何ナ
ル善根ヲ修シテカ此ノ土ニ生ル、事ヲ可得キ。願クハ此レヲ
教ヘ給ヘ」ト。(今昔)

・智光頭面禮拜白佛言。「得修何善生此浄土。」(極記)

⑫・佛智光ニ告テ宣ハク「佛ノ相好・浄土ノ莊嚴ヲ可觀シ」ト。(今
昔)

・佛告智光曰「可觀佛相好浄土莊嚴。」(極記)

⑬・智光ノ申サク「此ノ土ノ莊嚴微妙広博ニシテ心・眼ノ及所ニ非
ズ。凡夫ノ心ニ何カ此レヲ觀ゼム」ト。(今昔)

・智光曰「此土莊嚴微妙広博心眼不及。凡夫短慮何得觀之。」(極
記)

この計一三例を検討すると、「今昔」編者は「極記」の本文を忠
実に漢字片仮名交り文に訓み下していったものと考えられる。整理
して示し、大方の傾向を確めよう。

(1) 引用動詞について (用例は①～⑬の番号で示す。)

(a) 「今昔」・「極記」が完全に一致する例

- ① (歎テ云クー歎曰) ③ (問テ云クー問曰) ④ (答テ云クー答
曰) ⑤ (云クー曰) ⑧ (答テ云クー答曰) ⑨ (問テ云クー問曰)
⑩ (云クー曰) ⑪ (佛ニ白シテ言サクー白佛言) ⑫ (佛智光ニ
告テ宣ハクー佛告智光曰)

⑪⑫の例などは原典を机辺に置いて書き下し文に直したこと

が明らかといえよう。

(b) 「今昔」・「極記」にずれのある例(引用形式としては一致している)

⑥ (云クー答曰) ⑦ (云クー重問曰) ⑬ (申サクー曰)
「今昔」にのみ引用動詞のある例

② (思歎キテ「極記」には引用動詞なし)

(a) (b)は引用動詞としては両書重なり合って問題がない。従って思惟動詞による心中言の引用以外の、すべての発話行動について、原典にある直接話法引用形式の中の引用動詞は、すべて引き写しに「今昔」に採られている。

(2) 語彙の対応について

対照した①～⑬において――を付した部分が極めて多いことを見ても、大半の語彙が用字も同じくして重なり合う。「極記」に存在する直接話法引用形式は、語彙も形式も基本的にそのまま利用して「今昔」の文章表現が成り立っている。

(3) 「今昔」における独自の表現

(a) 接続詞・指示語の添加

① (此レヲ・而ルニ・更ニ) ⑤ (專ニ) ⑥ (此ニ) ⑧ (然レバ)
⑨ (此レヲ・然ラバ) ⑩ (然レバ)

(b) 説明の補足・補充・解説(該当箇所ない部分は○印を付す)

① (死テ後何ナル報ヲカ受タラムー徒以逝去。受生之處。) ③ (此レヲ恠ムデー) ⑤ (浄土ニ生レムト願フ心有リ、何ノ可返キー願生浄土何耶) ⑦ (生タリシ時動ル所无カリキー生前無所行) ⑧ (不知ズヤ我レハ往生ノ因縁有ルニ依テ此ノ所ニ生タル也ー不知我往生因縁乎、汝ハ法文ヲ覺シテ其ノ義理ヲ悟テ智

恵明力也ト云ヘドモー) ⑩ (其ノ事我レ答フルニ不能ズー、阿弥陀佛ー佛) ⑪ (掌ヲ合セテー○、善根ー善、願クハ此レヲ教ヘ給ヘー○)

右に見るとおり、原典の文意がやや不分明な場合に解説的に書き直し(①⑤⑦)、前後の文脈から補足・補充が必要な場合に説明的な文言を付加(③⑧⑩⑪)している。変体漢文の原典を逐語的に漢字片仮名交りの漢文訓読文体に訓み下しているように見えながら、細かく叙述の一貫性が追求されていることがわかる。

(c) 地の文の表現との統一性

「今昔」巻十五第一語の主人公は元興寺の智光・頼光であるが、この二人の人物の取り扱い方が、原典と異なっている。原典「極記」は昌頭の人物紹介においても頼光にのみ光をあてて、智光は単なる狂言廻し(質問者・夢見る人)であるのに対して「今昔」では題名どおり二人の人物を共に往生人として対等に描写し、二人の個性の違いを昌頭から書き分けようとする。

原典の「頼光及暮年與人不語。似有所失。」に該当する部分の「今昔」の文章は次のように二人を対比的に描く。

頼光漸ク老ニ至ルマデ懈怠ニシテ學問ヲモ不為ズ、物言フ事モ无クシテ常ニ寝タリケリ。

智光ハ心ニ智ノ深クシテ勲ニ學問ヲ好テ止事无キ學生ト成ヌ。

原典「似有所失」に対して「今昔」は「常ニ寝タリケリ」というわかりやすい表現に改めている。それにかかわって直接話法引用形式の内部にも細かく改変の筆が及んでいる。

① (學問不為ズシテ常ニ寝タリキー無行法)

⑧(他ノ思ヒ无クシテ静カニ寝タリシ也。〇)

右の二つの直接話法引用文は、巻頭の地の文に対応していることと明らかで、単に原典「極記」の訓み下しと断じることが、はばかられよう。

(d) 付加された直接話法引用文

先に概観したとおり、「今昔」において単独に付加された直接話法引用文は、心中言の引用文②が見られるだけである。これはその直前の直接話法引用文に相当する原典の文中に「受生之處」という文言が存するのを受けて、当該文言が「今昔」においては異なる文脈の中で、とらえられたことに見合う付加と考えられる。

(4) 「今昔」において省筆されている表現

これは①⑬の中で⑧の中に一箇所見られるものである。

此レヲ深ク思ヒシニ依テ物云フ事无カリキ(今昔)

情而思之。知不_レ容易。是以捨人事絶言語。(極記)

〃〃〃の部分の「極記」の文章は「今昔」に該当部分がなく、原

典の記述を「今昔」において省筆したと考えられる。往生の容易ならざることを知って、人事を捨てるといふ頼光の往生人としての覚悟のほどと往生のきびしさをいう部分が欠落することにより、「今昔」においては、智光・頼光と二人の人物の併立という面が強くなり、冒頭の人物紹介の姿勢と呼応する省筆といえる。

四、「今昔」「験記」の比較

次にB群計一〇話を検討する。前項と同様にまず本文を対比して提示し、ついで直接話法引用文を対応して考察する。

美濃国僧薬延往生語第三十

今昔、比叡ノ山ノ無動寺ニ聖人有ケリ。幼ニシ山ニ登テ出家シテ、師ニ随テ頭蜜ノ法ヲ學ブニ、皆、其ノ道ニ達_レリ。亦、道心深クシテ後世ヲ恐ル心有リ。而ルニ、事ノ縁有ルニ依テ、美濃ノ國ニ下ル間、日暮レテ道ノ邊ニ有ル人ノ家ニ借宿ス。其ノ家ノ主ヲ見レバ、形、法師也ト云モ、僧ニ非ズ、頭ノ髪ハ二寸許ニ生ジテ、俗ノ水干袴ヲ着タリ。亦、狩・漁ヲ役トシ魚鳥ヲ食_レテ。聖人、此レヲ見テ、此ノ家ニ宿ケル事悔フト云モ、④「夜中ニ可出キ事ニ非ズ。其ノ夜ヲ曉サム」思テ有ルニ、夜半過ル程ニ、此ノ家主ノ法師、起テ、沐浴シテ浄キ衣ヲ着テ、後ノ方ノ戸ヨリ出ス。②「何ヘ行クソ」思テ、尻ニ立テ伺ヒ見レバ、小サキ屋有リ、持佛堂也ケリ。其レニ入ス、火ヲ打テ、御明ヲ燈シ香ニ付ケテ、念珠ヲ攤テ佛ヲ礼拜シ、先ツ懺法ヲ行フ。次ニ法花經ヲ誦ス、一部

第九十四沙彌藥延

沙彌藥延。美濃國人也。時無動寺有一聖人。頭密兼習。亦有道心。有事緣故。下向美乃。宿路邊舍。見其宅主。雖似法師。作法非僧。頭髮二寸。著俗衣服。田獵漁捕。食完噉鳥。狼籍不善。宛如具縛。聖人見此。心生怖畏。悔恨宿此焉。此惡比丘。夜半起已。沐浴身體。著清淨衣。往後園中。入持佛堂。取初修行法華懺法。次發誓願誦

ヲ誦シ畢ルニ夜曉ヌ。其ノ後、弥陀ノ念佛ヲ唱フ。聖人、此レヲ聞クニ、⑤「奇異也」ト思テ、本ノ所ニ返ヌ。

已時ニ至テ持佛堂ヲ出ヌ、聖人ノ所ニ至テ云ク、④「弟子藥延、罪業ニ依テ致生ヲ宗トシ、慙ノ心无シト云モ、偏ニ心ヲ至シテ法花經ヲ誦シ、弥陀ノ念佛ヲ唱テ、極樂ニ往生セム事ヲ願フ。此レニ依テ、某年某月某日、必ズ極樂ニ往生ス」ト。聖人、機縁深ク在マシ今、此ノ家ニ来リ宿リ給。

必ズ其ノ期ニ結縁シ給ヘ」ト。聖人、藥延ガ言ヲ聞クト云モ、難信シ。⑤「法花經ヲ誦シ、念佛ヲ唱フル、此レ无限キ功德也ト云モ、魚ヲ捕リ鳥ヲ致ス、此レ極メテ重キ罪障也。何ゾ、如此ノ罪ヲ造乍ラ忽ニ極樂ニ往生スル事有ヤ。此レ、只云フ事ト」思テ、無動寺ニ返ヌ。

其ノ後、年来ヲ經テ、聖人、彼ノ美濃ノ國ニシテ藥延ガ契シ事共皆忘リニテ、而ル間、聖人ノ夢ニ⑥「東方紫雲聳テ聖人ノ房ニ近付キ、音樂ノ音空ニ有リ。雲ノ中ニ音有テ、聖人ニ告テ云ク、⑦「沙彌藥延、今日、極樂ノ迎ヘヲ得、往生スル也。先年ニ契リ申シ事ハ、結縁不忘デ、今、来テ告ゲ申ス也」ト。驚キ覺テ後、聖人、涙ヲ流シテ、泣ク礼拜シテ悲ヒ貴ヒケ

聖人ノ語ルヲ聞ク人、皆、悲ヒ不貴スト云フ事无カリケ比ノ事□承平ノ比ノ事也リ。其ノ後、傳ヘ聞クニ、彼ノ藥延ガ死タル時、違事无シト語り傳ヘタトヤ。

「今昔」第三十語には①⑤の直接話法引用文がある。更に夢の

引用②とその内部に二重引用、③が含まこまれているものを加えて、全体で計七例の直接話法引用形式が見られる。本話の場合は、夢の引用も他の直接話法引用と同様な引用形式であるから、計七例を合わせ対比してみる。

①・「夜中ニ可出キ事ニ非ズ。其ノ夜ヲ曉サム」ト思テ有ルニ（今昔）

・該当箇所なし（驗記）

②・「何ヘ行クゾ」ト思テ（今昔）

「今昔物語集」卷十五の直接話法引用形式

法花經。至于天曉。一部誦訖。乃至夜明。

及于已時。念佛觀行。誠以不退。對聖人言。

④「沙彌藥延。依罪業力。雖行致生逸放破戒無慚。偏生信力。誦法華經。以其年月。必生極樂。聖人有緣。來宿此舍。必可結縁云々」。聖人雖聞沙彌之語。不生堅信。⑤「讀誦法華經。雖是貴勤。致鹿害鳥。是深重罪。何得往生」。還無動寺。經數年。

全忘藥延往生之事。爰天布雲。頻有樂聲。從東方吐紫雲。遙聳西方。紫雲垂布。近覆上人房。空中有聲。⑥「沙彌藥延。今日往生極樂世界。先年契言。結縁不忘。今所奉告云々」。聖人驚駭。流不覺淚。禮拜讚嘆。承平年中事矣。

・該当箇所なし（驗記）

③・「奇異也」ト思テ（今昔）

・該当箇所なし（驗記）

④・聖人ノ所ニ至テ云ク「弟子藥延罪業ニ依テ致生ヲ宗トシテ慙ノ心无シト云ヘドモ、偏ニ心ヲ至シテ法花經ヲ誦シ、弥陀ノ念佛ヲ唱テ極樂ニ往生セム事ヲ願フ。此レニ依テ某年某月某日、必ズ極樂ニ往生セムトス。聖人機縁深ク在マシ今此ノ家ニ来リ宿リ給。必ズ其ノ期ニ結縁シ給ヘ」ト。（今昔）

・對聖人言「沙彌藥延。依罪業力。雖行致生逸放破戒無慚。偏生

信力。誦法華經。以其年月。必生極樂。聖人有緣。來宿此舍。必可結緣云々。」(驗記)

- ⑤ 「法花經ヲ誦シ念佛ヲ唱フル、此レ無限キ功德也ト云ヘドモ、魚ヲ捕リ鳥ヲ斂ス、此レ極メテ重キ罪障也。何ゾ如此ノ罪ヲ造乍ラ忽ニ極樂ニ往生スル事有ラムヤ。此レ只云フ事ゾ」ト思テ(今昔)

・「誦法華經。雖是貴勤。斂鹿害鳥。是深重罪。何得往生。」(驗記)

- ⑥ a・聖人ノ夢ニ「東方ヨリ紫雲聳テ聖人ノ房ニ近付キ音楽ノ音空ニ有リ。雲ノ中ニ音有テ聖人ニ告テ云ク、a『沙弥樂延、今日極樂ノ迎ヘヲ得、往生スル也。先年ニ契リ申シ事ナルハ、結縁不忘シテ今來テ告ゲ申ス也』」ト。(今昔)

・爰天布雲。頻有樂声。從東方吐紫雲。遙聳西方。紫雲垂布。近覆上人房。空中有声。沙弥樂延。今日往生極樂世界。先年契言。結縁不忘。今所奉告云々。(驗記)

この計七例の直接話法引用文を検討すると、「今昔」編述者は「法華驗記」の変体漢文をかなり大巾に書き改めていることがわかる。具体的に検討し、大よその傾向をとらえよう。

(1) 引用動詞について

- (a) 「今昔」・「驗記」が一致する例
- ④ (云ク一言)
- (b) 「今昔」にのみ引用動詞のある例 (○印、該当例なし)
- ① (ト思テ) ② (ト思テ) ③ (ト思テ) ④ (ト思テ)
- ⑤ (ト思テ) ⑥ a (夢ニト) ⑦ a (告テ云ク)

本話の場合、発話行為が示されている直接話法引用文の唯一の例④は、原典に拠って表現されているが、心中言および夢の引用においては、原典にはいずれも引用動詞がなく、直接話法引用形式とは判断できない。原典には示されていない、主人公樂延の挙動に不審と恐怖を覚えた無動寺の聖人の心事を直接話法引用形式を用いて示すことによって、説話の展開を自然にしている。事件を忘れてしまった聖人の夢に樂延があらわれて往生を予告することとも、「驗記」においては夢告ではなく、現実空中に声あって知らされた如くに記されている。「今昔」編述者は、原典「驗記」の行文を利用しつつも、独自の文体に統一して直接話法引用文を十分に活用している。

(2) 語彙の対応について

該当部分が欠落している①②③は別として、④⑤aについては大よそをいえば、両者の語彙は一応対応している。原典「驗記」の行文に従って訓み下しているが、その姿勢は忠実一方の訓み下しというよりも、原典の用語はそのまま活かしながら、説明を補い、漢語をやわらげている。

(3) 「今昔」における独自の表現

- (a) 表現の補足・言い換え・やわらげ
- ④ (致生ヲ宗トシテ慙ノ心无シト云ヘドモ、雖行致生逸放破戒無漸、偏ニ心ヲ至シテ偏生信力、弥陀ノ念佛ヲ唱テ極樂ニ往生セム事ヲ願フ) ⑤ (此レニ依テ某年某月某日、以其年月、機縁深ク在マシテ有縁、必ズ其ノ期ニ結縁シ給ヘ、必可結縁)
- ⑥ (法花經ヲ誦シ念佛ヲ唱フル、讀誦法華經、此レ無限キ功德也ト云ヘドモ、雖是貴勤、魚ヲ捕リ鳥ヲ斂ス、斂鹿害鳥、何ゾ

如此ノ罪ヲ造作ラ忽ニ極楽ニ往生スル事有ラムヤ。此レ只云フ事ゾー何得往生) (a) (今日極楽ノ迎ヘヲ得往生スル也ー今日往生極楽世界)

全体に細かく補充・言い換えの筆が入っていること明らかである。前項「極記」の場合に比し、補筆のきめが細かく、表現の全体に及んでいることが見てとれる。

(b) 付加された直接話法引用文

原典「驗記」には無く、「今昔」で独自に付加している直接話法引用文は①②③の計三例を見る。いずれも心中言の引用で、これは前項「極記」の場合と同じである。いずれも無動寺の聖人の行動の裏打としての思惟内容を示すものであるが、原典に描かれている行為のみを記すのではなく、背景となる判断の過程をも言表することにより、事件の推移はより滑らかに展開する。説話の迫真性に大きく寄与している付加である。

以上、「今昔」と「驗記」の直接話法引用文を、第三十語―第十四話の対照を例に考察した。他の計九話についても同様の手順によってその傾向を見ると、ほぼ本例と一致する。前項「極記」を原拠とする計二八話の傾向に比して、この項で扱う計一〇話は、全体

として直接話法引用文も少なめである上、原典の文章を活かしながらも、きめ細かい補筆・言い換えによって、原典に基づく引用文の表現も自然な流動性のあるものに変えている。

五、「今昔」「極記」「驗記」共通話の比較

三書に共通するC群は、「今昔」の説話番号で19・21・34・42・44の計五語であるが、この群の「今昔」本文は、直接話法引用形式の観点からは各々著しい特色を有する。第十九語(陸奥国小松寺僧玄海)・第二十一語(大日寺僧広道)の二話の直接話法引用形式は、夢の引用が二重引用を含みこんで長文に及んでいる他には、第十九語に二例、第二十一語に一例があるだけである。第三十四語(高階良臣)には末尾注文の中に「奇異也」の例が見られるのみであり、第四十四語(伊豫国越智益躬)には直接話法が一例も見出せない。前二話については「極記」「驗記」いずれにも「夢」という引用動詞に当たる語が存在し、後二話については、原典二書いずれにも直接話法引用文はない。その点からいえば、この四話は、原典の文章表現に忠実といえよう。

残る一話は、直接話法引用文の多い文章で、原典との懸隔も大きい。本文を対照して示そう。

義孝小將往生語第卅二	極記第三十四話・驗記第百三話
<p>今昔、一條ノ攝政殿ト申ス人御ケリ。其ノ御子ニ、兄ハ右近少將舉賢ト云フ、弟ヲバ、左近ノ小將義孝ト云ケリ。義孝ノ少將ハ、幼ルカリケ時ヨリ、道心有深ク佛法ヲ信シテ、惡業ヲ不造、魚鳥ヲ不食ス。</p>	<p>右近衛少將藤原義孝。太政大臣贈正一位謙徳公第四子也。深歸ニ佛法ニ終斷ニ童腥。勤王之間誦ニ法華經。天延二年秋病ニ痼瘡ニ而卒矣。</p>

其ノ時ニ、殿上人數有テ、此ノ少將ヲ呼バ、行タルニ、物食ヒ酒飲ナドシケルニ、鮎ノ子鱸ヲ備ケレバ、義孝ノ少將、此ヲ見テ、不食ズシ云ク、①「母ガ肉村ニ子ヲ敢ムヲ食ソ」ト云テ、目ニ涙ヲ浮ベテ立テ去ルニ、人々、此ヲ見テ、膾ノ味モ失テ有ケル。此様ニシ魚鳥ヲ食フ事无ケリ。況ヤ、自ラ致生スル事ハ永ク无ケリ。只、公事ノ隙ニハ常ニ法花經ヲ誦シ、弥陀ノ念佛ヲ唱ヘケル。

而ル間、天延二年ト云フ年ノ秋比、世ノ中ニ痲瘡ト云フ病被テ、極テ騒ガシカリ有明ノ月ノ極デ明カリケ夜、弘徽殿ノ細殿ニ女房三人許居テ物語ル間、義孝ノ少將、襦袢束^{ヨカニ}殿上ノ方ヨリ来ニヤ有ラム、細殿ニ来テ女房ト物語スル様、現ハニ故有ラム見エテ、墓无キ事ヲ云フニ付テモ②「道心有ルカナ」思エケ夜漸ク深更バ、少將、北様ヘ行ヌ、共ニハ小舎人童、只一人ソ有ケル。北ノ陳漸ク行ク程ニ、方便品ノ比丘偈ヲ極テ貴ク誦シ行ケル。細殿ニ有ル女房共、此ヲ聞テ、③「此ノ君ハ道心深キ人ナメ、何チ行ト」思テ、侍ヲ呼テ、④「此ノ少將ノ行カム方見テ、返来レ」ト遣レバ、侍、少將ノ後ニ立テ行クニ、小將、土御門ヨリ出テ、大宮登リ行テ、世尊寺ノ東門ヨリ入テ、東ノ臺ノ前ニ紅梅ノ木ノ有ル下ニ立テ、西ニ向テ、⑤「南无西方極樂阿彌陀佛命終決定往生極樂」ト礼拜シテ板敷ニ上ケル。侍、此ヲ見テ、小舎人童ニ寄テ、⑥「例モ此クヤ礼拜シ給フト」問バ、童、⑦「人ノ不見ヌ時ハ、例モ必ズ此クナ礼拜シ給フト」答ヘケ侍、返テ此ノ由ヲ語バ、女房共、此ヲ聞テ極テ哀レガリ而ル間、其ノ次ノ日、小將、痲瘡ニ煩テ、⑧「内ニモ不參ズ」ナケル程ニ、兄ノ舉賢ノ小將モ同ジク煩テ、寢殿ノ西・東ニ臥ム共ニ煩ル。母上ハ中ニ立リ、行テ見給ルニ、兄ノ少將ハ只三日重ク成テ失バ、枕ヲ賛ヘテ、例ノ失タル人ノ如ク葬シテ、然レバ、弟ノ小將ノ煩フ方ニ、母ハ涙テソ歎悲レ。其ノ病、亦、極テ重ト見給ケル程ニ、少將、音ヲ舉テ方便品ヲ誦シケ、半許誦ル程ニ失リ。其ノ間、艶ス馥キ香、其ノ所ニ満ケリ。然レバ、⑨「一度ニ二人ノ子ヲ失ヒテ見給ヒケル母ノ御心何許有ケム、父ノ攝政殿御カバ、何許思シ歎トマシ」人云ケル。

其ノ後、三日ヲ経テ、母ノ御夢ニ⑩「兄ノ小將、中門ノ方ニ立テ極ク泣ク。母、臺ノ角ニシ此ヲ見テ、⑪「何ト不入給ズシ此ハ泣給フ」問ヒ給レバ、少將、⑫「參トハ思モ、不參得ヌ也。我レ、閻魔王ノ御前ニシ罪ニ被勘ニル」此レハ未ダ命遠ケリ、速ニ可免テ」ト被免バ、返来ニ、怨テ、枕ヲ被

命終之時尅誦ニ方便品。氣絶之後異香滿レ室。同府丑相藤原高遠。同在ニ禁省ニ相友善矣。義孝卒後不レ幾。夢裏相伴宛如ニ平生。便詠ニ一句詩云。其詩謂。

昔契蓬萊宮裡月。今遊極樂界中風云。

(極記)

第三百三右近中將藤原義孝

右近中將藤原義孝。太政大臣贈正一位謙徳公第四子也。深歸佛法。終斷葷腥。勤王之間。誦法華經。天延二年秋。病痲瘡而卒矣。命終之間。誦方便品。氣絶之後。異香滿室。同府丑將藤原高遠。同在禁省。相友善矣。義孝卒後不幾。夢。相伴宛如平生。便詠一句詩言。昔契蓬萊宮裏月。今遊極樂界中風矣。(驗記)

賛^ニケレ魂ノ入ル方ノ違^テ、活^ル事ヲ不得^ズ迷^ヒ行^ク也。心^キ疎^セ態^セ給^ヘル^ト恨^{タル}氣色^ニ泣^ク」ト
見^ル程^ニ、夢^覺ス。母、夢^覺テ後、思^ムシケ事何許也。

亦、其ノ時^ニ右近ノ中將藤原ノ高遠^ト云フ人有^ケリ、義孝ノ小將^ト得意^ナ有^ニケル夢^ニ⑥「故義孝ノ
小將^ニ値^ス。高遠ノ中將、此^レヲ見^テ、極^ニ喜^ビ思^フ、⑥「君ハ何^コニ御^スル^ト問^レバ、義孝ノ小將、
答^テ云^ク、

⑥昔^ハ契^キ、蓮菜ノ宮ノ裏ノ月^ニ、今^ハ遊^ブ、極^ニ樂^シ界ノ中ノ風^ニト云^テ、搔^ツ消^ツ様^ニ失^ヌ」ト見^テ、
夢^覺ス。其ノ後^チ、高遠ノ中將、此ノ文ヲ書^テ付^テ置^リ。此^レヲ聞^ク人、⑩「道心有^ル人ハ、後ノ世ノ事
ハ憑^シカルベシ」云^テ、讀^メ貴^ビル。

小將、生^タリ時^モ、身ノ才^有テ文ヲ吉^ク作^ケレ夢ノ内^ニ作^{タル}文^モ微妙^キ物^ニ有^ル。夢^ニ極^ニ樂^シ遊^ブ
フ^ト告^{タル}亦、終^ニ往^シ生^ノ相^ヲ現^ズ、疑^ヒ无^キ往^シ生^ノ人^也トナ語^リ傳^ルヘタトヤ。

「今昔」第四十二語には直接話法引用文が、①⑩の計10例およ
び夢の引用④⑥、その各々の中に二重引用④⑤⑥、⑤⑥⑥、更
に三重引用④⑤中の①と総計一七例みられる。典拠は、「極記」第
三十四話であるか「驗記」第百三話であるか明らかではないが、本
文を比較してみれば、両書の本文は同一書の異本といってもよいほ
ど酷似している。(本文中に異同部分に傍線を付したが僅差である。)
この両書の間には直接の書承関係を考えることができよう。「今昔」
との関係を考えるのにあたっては、どちらが典拠として用いられた
にしてもこの場合大きな問題ではない。

「今昔」の本文中の、原典二書に拠る記述の部分に傍線を付し、
「今昔」独自の表現の部分を明らかにした。一見して明らかながと
く、原典両書の記事は、「今昔」の表現の骨子にはなっているが、
描写の大半は「今昔」独自のものといえる。その豊富さは、あるい
は他に披見した出典があるかとも疑える。しかし現在のところ知ら

れていないので、一応「今昔」の独創と見なすべきであろう。とす
れば、本話において「今昔」編述者の創作性は十分に発揮されてい
ると思われる。

直接話法引用文に関していえば、⑥の詩句以外すべて「今昔」
の独創にかかわる部分に存する。「極記」「驗記」の文章に基づいて
書き進めていったにしても、他からの知見「大鏡卷五伊尹伝」の
他「七卷本宝物集二」「九卷本宝物集三」「江談抄四」「続古事談二
一六」「元亨釈書一七」「義孝伝」などに同話類話を散見する一を材
料に説話をふくらまし、描写を豊かにして、表現に活気を与えてい
る。その中心は、詩句の引用以外の計一六例にも及ぶ直接話法引用
文の存在にあるといえる。

六、出典未詳話の検討

D群計一話は、「極記」「驗記」に共通話を持たない。この中に

は同一人物を扱う説話は存するが、文章内容から考えて異伝と考えられるものも含めている。この計一一話の中の直接話法引用形式は概して豊富であるといえる。次に示す。

番号	「今昔」題名・説話番号	直接話法引用文
1	薬師寺濟源僧都往生語第四	①③、二重引用 ①
2	醍醐觀幸入寺往生語第十四	①
3	比叡山僧長増往生語第十五	①⑬、二重引用 ⑥
4	始雲林院菩提講聖人往生語第廿二	①⑩ ⑨⑨
5	始丹後国迎講聖人往生語第廿三	①⑭、二重引用 ②
6	鎮西行千日講聖人往生語第廿四	①⑰ ②⑧
7	北山餌取法師往生語第廿七	①⑩、夢 ① ① ① ①
8	源信僧都母尼往生語第卅九	①②④、二重引用 ②
9	鎮西筑前国流浪尼往生語第四十一	①⑦、 ②③ ③⑩ ③⑮
10	造惡業人歿後唱念佛往生語第卅七	①⑨、二重引用 ②
11	仁和寺觀峯威儀師從童往生語第五十四	①⑥ ③③ ③③

上に見るとおり、出典未詳（「極記」「驗記」に共通話を持たない）説話群においては、第十四語を除いて、いずれも相当数の直接話法引用文を有し、説話の展開が会話文によって示されている事例が多い。会話文を用いて場面の進展を語るといことは、読者の臨場感を高め、著しい迫真性と説得力をもたらす表現法であるといえる。「今昔」編述者は、「極記」「驗記」の変体漢文の文体に拘束されない場合、より一層自由に直接話法引用文を駆使して、表現効果を高めていると考えられる。

七、結

以上、三〇六において、「今昔物語集」巻十五の直接話法引用文が、原典とみなされる「日本往生極樂記」「法華驗記」の本文とどのようなかわりがあるかを見てきた。その結果、「極記」に拠る説話は基本的にはその原文に準拠する度合が高く大むねは原変体漢文の訓み下しに近い文章で書かれているのに対し、「驗記」に拠る説話は原文に準拠しつつも細かい補筆・言い換えを行なって原変体漢文をやわらげている。三書に共通する説話に関しては、僅か5話であるが、基本的には原典の記述に忠実である傾向が窺えるが、簡単な原典の記述を大巾にふくらまして活気のある場面描写を行い、その際直接話法引用文を多用している。「極記」「驗記」両書のいずれにも共通話を持たない計一一話についても、全体的に直接話法引用文を多用した活気のある場面描写を見せている。

出典文献への依存度が高いことをいわれる巻十五においても、文章表現の細部にわたって「今昔物語集」編述者の創作意識が働き、統一的な文体を維持する努力が払われている。原典の文言を踏襲す

る方法は、経典をはじめとする内外の文献を基に説話集を編むという作業に伴う当然の営為であって、それを越えた文章表現において「今昔物語集」編述者の独創性が発揮され、それは説話の具体的な場面の活写・物語性の追求の方向に働いているといえよう。

注

1. 植松茂『古代説話文学』（塙書房・昭三十九年）、原田行造『『本朝法華験記』所収説話の諸特徴（上）』（金沢大学教育学部紀要・昭四八年十二月）など。
2. 志村有弘『往生伝研究序説―説話文学の側面―』（桜楓社・一九七六年）。第二部第二章（361ページ以下）に従来の諸説が詳細に紹介されている。
3. いわゆる会話文のみならず、直接話法の形式で引用される心中言・夢・古詩その他も対象としてとりあげる。
4. 黒部通善「今昔物語集卷十五考―作者の説話配列方法とその意図について―」（名古屋大学国語国文学・昭三五年）
5. 本稿は全体的な検討結果を提示する紙幅のゆとりがない。今後更に具体的な検討内容を発表する機を得たい。